

(学校番号003)

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【木崎小】

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	(1)メタ認知能力: 自分の学びを客観的に捉え、次に繋げる「質の高い振り返り」をする資質・能力。 (2)協働的解決力: 他者との対話を通じて、試行錯誤しながら最適な解決策を導き出す資質・能力。
↓	
実施する学力向上策 【時期・頻度】	単なる意見交換ではなく、他者と関わる必然性のある課題設定を行う。友達の見解によって自分の考えが変わったことを「学びの深まり」として教師が積極的に称賛し、共有する。【毎単元・1課題】 単なる感想(「楽しかった」等)ではなく、「何ができたようになったか(成果)」「何がまだ不十分か(課題)」「次はどう取り組むか(次への見直し)」を記述させる。児童が書いた振り返りに対し、教師がクラウド(Google Classroom等)やコメントを通じて即時的・継続的にフィードバックを行い、児童が自分の成長を実感できるようにする。【通年・毎単元】

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	・全国学力・学習状況調査の結果では、国語、算数ともに県平均及び全国平均を上回り、学習内容の定着が見られた。一方で、両教科とも記述式問題の正答率は低い傾向にあった。また、算数では「数と計算」「図形」「データの活用」など複数の領域を関連付けて考える問題において、全国平均と同程度の正答率であった。基礎的な知識・技能は身に付いているものの、それらを活用して考えたり表現したりする問題には課題が見られた。 ・児童質問紙では、「学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」という質問に対し、9割を超える児童が肯定的に回答した。
↓	
結果から考えられる 児童生徒の実態	・記述式問題の正答率が低いことから、自分の考えや根拠を文章で整理し、相手に分かりやすく表現する力には課題が見られる。また、算数において複数の領域を関連付けて考える問題の正答率が全国平均と同程度であったことから、身に付けた知識や技能を活用し、課題解決につなげる力については伸びしろがあると考えられる。 ・学級での話し合い活動を通して自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりできていると回答した児童が9割を超えており、他者と協働しながら学ぶ意識は高いことがうかがえる。

③	中間評価
学力向上策の 実施状況	評価(※) B 児童は協働的な学習に対して肯定的な意識をもっている。一方で、記述式問題や複数の領域を関連付けて考える問題には課題が見られ、話し合い活動が意見交換にとどまり、考えを深めたり再構築したりする学習経験は十分ではないと考えられる。また、振り返りへのフィードバックは行っているものの、自らの学びを客観的に整理し、表現する力の向上が求められる。 そこで、既習事項を関連付けながら解決方法を考える課題や、複数の考え方を比較・検討する課題を設定し、他者と関わる必然性のある学習場面を充実させる。また、話し合いを通して考えが深まったり変容したりした過程を価値付けるとともに、振り返りでは学習の成果・課題・次への見直しを記述させる。さらに、教師が意図的にフィードバックを行うことで、自らの学びを客観的に整理し、言葉で表現する力や学んだことを活用する力の向上を図る。
↓	
学力向上策の 見直し	(変更なし)

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
↓	
結果から考えられる 児童生徒の実態	

⑤	年度末評価
学力向上策の 実施状況	評価(※) ↓
今年度の成果と 次年度の課題	

【参考データ】 ※記入任意	「重点的に育成する資質・能力」の状況をみる指標 ※この欄に記入した内容は、学校Webページには掲載しません。
全国学力・学習状況調査の 調査問題・質問項目 (内容・結果)	
さいたま市学習状況調査の 調査問題・質問項目 (内容・結果)	

※評 価

A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【木崎小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	本年度の調査結果において、全体として基礎的・基本的な知識・技能の定着が確認された。今後は問題解決型の授業をさらに充実させ、習得した力を活用する場面を設けることで、学力のより一層の向上を図っていく。また、今年度重点的に取り組んだ「振り返りの時間の確保」については一定の成果が見られたものの、今後は単に活動を記述するだけに留まらず、自身の理解状況を客観的に捉え、自律的に次の学びを調整できるような「質の高い振り返り」を促す指導の工夫・改善に注力していく。
思考・判断・表現	本年度の成果である「協働的に学ぶ時間の確保」を次年度も継続し、身に付けた知識・技能を実生活や多様な場面で活用できる授業づくりを推進していく。その際、単一の教科や単元に留まらず、教科横断的な視点や単元の系統性を意識した教育課程を編成・実践することで、児童が協働的に学び意義をより深く実感できる環境を整えていく。こうした経験の積み重ねを通じて、主体的に学び、自らの新たな考えを形成して他者へ表現する力を育成するとともに、対話の中で得られた気づきを個々の確かな学力へと還元させる指導を一層伸長させていく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 自分が何を学んだか理解し、学びを積み重ね自己調整していくことに課題がある。 <指導上の課題> 児童が自らの学びを振り返る時間が十分でない。個に応じた指導を充実させていく必要がある。	⇒ 意識的に振り返りをする時間を確保し、その振り返りから次の学びの課題を設定できるように指導していく【毎時間】 朝に行っている「学びの時間」を活用し、一人ひとりの課題にあった学習を進めていけるようにする。【週1回程度】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 課題に対して友だちと助け合ったり、伝え合ったりしながら学んでいくことに意欲に課題がある。 <指導上の課題> 単元の中で協働的に学ぶ時間を設ける。協働的に学ぶ必要感をもてるような授業づくり	⇒ 研究の視点の中に「協働的に学ぶよさを感じ、自分たちで考え導ける子ども」を位置づけ毎単元意識して授業を行う。【毎単元】 魅力ある導入や必要感のある課題設定、解決の見通しをもてるような教材の工夫なども行う。【毎単元】

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能	A	さいたま市学習状況調査において、全学年・全教科で市平均を上回る良好な結果が得られたことは、教員が教科の特性を生かした丁寧な指導を日頃から実践してきた成果であり、確かな知識・技能の定着が図られたものと考えられる。一方で、生活習慣調査における「学習内容を見直し、次の学習につなげる」という項目の回答が市平均を下回っており、振り返りの時間は確保されているものの、その内容を自身の改善に結び付けられていない児童の実態が把握できた。
思考・判断・表現	A	本年度のさいたま市学習状況調査における生活習慣調査において、「学級の友達との話し合いを通じた思考の深化や気づき」および「周囲の考えを尊重した協働的な課題解決」に関する項目で、第5・6学年ともに90%を超える極めて高い肯定的回答が得られた。これは児童が協働的に学び意義を感じ、他者との関わりの中から新たな価値を導き出している証拠であり、こうした日常的な対話重視の授業実践が、学方面での良好な結果を下支えする大きな要因となった。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語・算数・理科のどの教科においても埼玉県・全国の平均正答率を上回っている結果から、概ね理解できているといえる。R7年度さいたま市学習状況調査「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができると感じますか」における肯定的な回答の割合が90%であった。学習で身に付けた知識や技能を次の学習や日々の実生活に生かしていることが、確実な知識・技能の習得に繋がったと考えられる。今後も、身に付けた知識・技能を次の学びへと生かしていけるよう指導を継続していく。	
思考・判断・表現	国語・算数・理科のどの教科においても埼玉県・全国の平均正答率を上回っている結果から、概ね理解できているといえる。一方で、国語・算数・理科すべての教科で出題されている記述式の問題に対して、無回答率が高い。選択式で答えが決まっている問いに対しては自信をもって解答できるが、自分の考えを整理しながらまとめることに対しては苦手意識をもっている児童が多いように感じる。今後も、授業の中で、学習で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめたり、課題に対して自分たちで考えを導けるように指導を継続していく。	

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	全学年・全教科において市の平均正答率を上回る良好な結果を収めた。特に国語科の第3学年および第4学年においては、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の数値が前年度と比較して向上しており、経年での確かな成長が確認された。算数科の「図形」領域においても、第3・4・5学年のすべての設問で市平均を上回っており、辺、頂点、角といった図形の性質や構成要素についての理解が深く定着している。また、第5学年の社会科および第6学年の理科においても市平均を大きく上回り、前年度から継続して高い水準を維持することができた。今後も、これらの成果を維持・発展させるとともに、確実な知識・技能の定着を目指した質の高い授業を組織的に展開していく。	
思考・判断・表現	全学年・全教科において市の平均正答率を上回る良好な結果を収めた。経年比較においても、多くの学年で昨年度の数値を上回っており、知識・技能の習得に留まらず、児童自らが課題を解決する場面や思考を促す活動を重視した指導の成果が表れている。特に、第3・4学年の国語科「読むこと」では、市平均を大きく上回っており、叙述に基づき心情や様子の変化を捉える深い読解力が身に付いている。また、算数科の「図形」領域でも第3・4・5学年の全設問で市平均を超え、5年社会や6年理科でも前年度同様の高い水準を維持した。一方で、算数科の「データの活用」領域が市平均と同程度であったことや、第3・4学年の国語科「話すこと・聞くこと」において市平均を下回ったことが課題として挙げられる。今後は、習得した知識を生活場面等の実践に結び付けて活用する機会を設けるとともに、目的や相手に応じた適切なコミュニケーション能力を養う指導を強化し、学校全体の学力の向上を図っていく。	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	A	自己の振り返りができる時間を設定し、「何を学んだのか」、「どのように学んだのか」を振り返ることにによって自己の課題の把握や自己に適した学び方を捉える姿が見られた。振り返りを出た課題を授業内のみで行うのではなく、朝の時間や自主学習などの時間も活用しながら解決し、確実な知識・技能の定着を目指す。	変更なし
思考・判断・表現	A	デジタル学習基盤を活用することで、他者参照により友だちの考えを共有したり、課題解決をするために共同編集したりして協働的な学びをすることができた。今後は、各学年がどのように実践しているのか共有し、学校全体で取り組んでいくことを目指す。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)